

新美南吉生誕百年を前に

山本 英夫

(新美南吉記念館 館長)

これは、わたしが小さいときに、村の茂平というおじいさんから聞いたお話です。

昔は、わたしたちの村の近くの中山という所に、小さなおしろがあって、中山様というおと様のがおられたそうです。

その中山から少し離れた山の中に、「ごんぎつね」というきつねがいました。

新美南吉の代表作「ごんぎつね」の冒頭の一節です。

この「中山」のすぐ横に建っているのが、新美南吉記念館。記念館の中に入ると、南吉が18歳の時に書いた「ごんぎつね」の草稿や中学時代からの日記帳、多くの写真や作品・資料が展示してあります。ビデオやジオラマを楽しむこともできます。もっとも、中山様というお殿様が住んでいたのは、南吉の生家近くの常福院辺りで、ここにはお城はなかったと考えられていますが、南吉は、この中山の周りを童話の舞台として設定しました。中山、権現山、六地藏、赤い井戸、そして、秋には真っ赤な彼岸花が広がる矢勝川。昭和6年(1931年)10月4日、18歳の南吉は、自分が歩き、遊びまわったふるさとの情景の中に「ごん」といういたずら狐を描き、哀しくも美しい世界を創り出しました。

南吉が愛したふるさとの情景。その場所に半地下の建物、新美南吉記念館は建っています。入り口に立つと「童話の森」と名付けた「中山」がまぎれ目に入り、波打つ屋根に張り巡らした芝生が青く広がり、訪れる人の心を和ませます。天気の良い昼時には、弁当を広げたりボール遊びに興じたりする親子連れや、芝生の傾斜を転がって遊ぶ子供たちの姿があります。記念館というより芝生広場といった感のする光景です。

「建築の存在を可能な限り消し去り、仮に建築

が地上に立ち上がったとしても、周辺の自然の中のごく一部として捉えられたい。」

「主要な諸室を地下に沈め、地上は何事もなかったかのように、以前の静寂な田園風景を再生させる」という設計者(新家良浩氏)の基本テーマを自然に感じさせてくれる記念館です。小学校の校外学習で訪れる4年生の子供たちへの説明は、次のような話で始まります。

「この記念館、変わった建物ですね。これから君たちに見てもらう展示室は、この芝生の下にあるんです。これには理由があります。あの里山を地元の人たちは『中山』と呼んでいます。…そうっ、『ごんぎつね』の最初に出てきましたね。記念館を建てる時、あの中山のすぐ側に四角い大きな建物を建てたら、中山はどうなりますか。…そうっ、見えなくなるね。ですから、南吉さんが描いた中山や周りの風景を壊さないように、建物を地面の下に潜らせたのが、新美南吉記念館です。」

子供たちは、物語の中で学んだ「中山」の存在に驚くと同時に、自然の中にとけ込んでいる記念館の様子に納得し、「ごんぎつね」の舞台に浸っていきます。

南吉は、大正2年(1913年)7月30日に、現在の愛知県半田市岩滑中町に生まれ、昭和18年(1943年)3月22日、喉頭結核で亡くなりました。29歳7か月という若さでした。

余の作品は、余の天性、性質と大きな理想を含んでゐる。だから、これから多くの歴史が展開されて行って、今から何百何千年後でも、もし余の作品が、認められるなら、余は、其處に再び生きる事が出来る。此の點に於て、余は實に幸福と云へる。(昭和4年3月2日)

南吉の中学3年生の時の日記です。若さのもつ恐ろしいほどの気負いと自信に満ちた一節です。また、死の直前、安城高女の教え子への便りに、「たとひ僕の肉体は減びても君達少数の人が…僕のことをながく憶えていて、美しいものを愛する心を育てて行ってくれるなら、僕は君達のその心にいつまでも生きてゐるのです」（昭和18年2月9日 佐薙好子あて葉書）と、書きつづりました。

生誕百年の誕生日を目の前にひかえた今、南吉のこの願いや思いに応えるかのように、南吉の作品は、全国の子供たちに読み継がれ、多くの読者を得てきました。そして、「再び生きて」読む人の心に「美しいものを愛する心」を紡いでくれております。

昨年末に半田市教育委員会が、小学校中高学年の児童を対象に、4冊の集団読書テキストを発行しました。前年度の低学年児童を対象にした『幼年童話集』10作品のテキストに続く南吉作品の教材化でした。学年の発達に応じた作品の選定から表記の修正、挿絵の作成……すべてが市内の学校の先生方の手作り、そして、集団読書テキストという形で、市内13小学校に40セットずつ配布し、教室で全員の子供たちが一斉に読むこともできるようにするという実践です。

池につるしたランプを割って、古い商売と決別する「おじいさんのランプ」の巳之助。村人の善良さに接して改心する「花のき村と盗人たち」の盗人。自分の命を捨ててまでも子供を守る母の強さと優しさを描いた「狐」。人々のために井戸を掘り「わしはもう、思い残すことはないがや。こんな小さな仕事だが、人のためになることを残すことができたからのオ」と戦地へ向かう「牛をつないだ樁の木」の海蔵さん。

これら4つの作品は、南吉の言う「美しいものを愛する心」に満ちています。集団読書テキストにすることで、幼年童話10作品に合わせ、南吉のたくさんの作品を子供たちに読ませたい、半田という自分たちと同じ郷土に生まれ育った早逝の作家、南吉の、「美しいものを愛する心」を読み味わわせたいという教師の思いに敬意を表します。「ごんぎつね」は、昭和55年に全部の教科書会社の4年教材として採用されました。そして、

30年以上全国の子供たちに読まれ、国民的な教材と言われるまでになりました。それと同様に、これからの南吉の故郷の子供たちは、全員が、南吉の14の作品に親しんで南吉学習の土台が築かれていくことになります。本当にすばらしいことだと思います。

来年、平成25年は、いよいよ南吉生誕百年の年。現在、生誕百年記念事業実行委員会を中心に様々な事業が計画されています。

〈平成25年の主要企画〉

1月5日（土） 生誕百年開幕祭・記念モニュメント除幕

（於：新美南吉記念館）

3月22日（金） 没後70年記念法要・偲ぶ会

（於：光蓮寺・北谷墓地）

7月27日（土）～8月4日（日）

南吉生誕祭

（於：雁宿ホール・新美南吉記念館）

※ 期間中、雁宿ホール全館で、各種イベントと同時に、市民自主事業や小中学校の発表・展示、大型紙芝居の紹介をする計画です。27日（土）には、開祭式典と記念朗読会、30日（火）には、南吉100歳誕生日式典を予定しています。その他にも、市民合唱祭、記念シンポジウム、「南吉が愛したクラシック音楽～朗読とともに～」演奏会など、たくさんの催しを計画しています。詳しくは、今後、記念館ホームページ等で紹介していきます。

6月～9月

生誕百年記念「新美南吉童話賞」の募集

7月13日（土）～10月14日（日）

生誕百年記念特別展

「新美南吉と知多半島」（仮称）

9月～10月 生誕百年秋の行事

（於：新美南吉記念館・矢勝川周辺）

10月12日（土） 合唱オペラ「ごんぎつね」演奏会

（於：雁宿ホール）

10月中・下旬 市内小中学校「南吉ウィーク」

（於：各小中学校）

そのほか、生誕百年にあわせて、各種PRキャンペーンや記念館展示のリニューアル、新聞社と共催した全国巡回展（名古屋市・丹波市・堺市・静岡市・札幌市…）を実施し、全国各地でも、現在エントリー募集をしている各種団体による朗読会や音楽会等の自主事業が展開されます。今後こうしたそれぞれの取り組みを通して、南吉の生誕百年という大きな節目と一緒に祝い、多くの方々と盛り上げていきたいと強く思います。そして、南吉の作品が、これからも一層たくさんの方々に読まれていくことを切に願います。ご支援・ご協力をお願いいたします。

新美南吉記念館には、今日も、全国各地から多くの来館者があります。教科書で読んだからと話す子供、小さいころに読んだ童話に誘われて来ましたと懐かしむ方々、ずっと南吉に憧れてやっと来ることができたと喜ばれる方。南吉の作品は、そうした多くの人々に、今日も、南吉の求めた「美しいものを愛する心」を優しく語りかけています。



新美南吉記念館・中山 全景